

中国の路線闘争



中嶋嶺雄氏

中嶋嶺雄東京外大助教授に聞く

その後奇跡的な復活を待た

が、その復活は「病を治して人を救う」という毛沢東主席の温情によつてではなく、やはり、路線闘争の二環であった。七〇年代前半に、中国は、周恩来首相を中心に、外交の転換を行った。一口にいつと、内政的には脱文革である

三國志以来の伝統

中嶋氏 路線闘争は、本来中国の社会主義建設をいかにして実現

治の世界で人間のドラマが演じられるのを好むようだ。ある意味では「三國志」以来の伝統かもしれない。

もう一つ、中国には側近政治あるいは毛沢東政治にみられるようなある種の家長政治的な流れがあり、この面からも権力闘争に巻き込まれた。これは毛沢東政治にとつて悲劇であるともい

面だけを絶対化するようになったとも端的に表現すると「貧困のユートピア」に尽きる。食ひさの今の現実の試練にさらされて、いわゆる実務派から受け入れられなかった二への反発があるのではな

天安門事件は中国にとつてユニークな事件だった。お国柄からいって数十万の人が自然発生的に集まることは考えられず、参加した人たちは「自覚をもつて組織された者」とみるのが常識的であろう。鄧支持とまではいかなくても、走資派批判に対する不満や周

批判への発展をおそれた人たちがみることができるよう。と思つて。とくに象徴的なのは、事件の中で若い層から文革派の中心人物である江青夫人への批判が行われたことだ。こうした側近政治への批判を押しつがず形で、無理に事態收拾に持ち込んだ。華国鋒首相がNO2にランクされたとはいえない、また毛主席の後継者とはいえない。反

走資派闘争が急きよぶて決着をみたところに、将来の不安材料を残したと思つた。

文革派の中には、毛主席が健在でありながら、なお現実には急務する傾向が出ていたから、早くつみ取つてしまわなくては――との危機意識が強まった。

――文革派は生産現場にある大衆からどの程度支持されているのか。

私は八年ぶりに昨年訪中したが、物は豊富になり、衣と食に関してはおもてなしがなされている。しかし黄金体系は十数年凍結されたままなので、品質のよいものを買つたために品質は副産物だったり、労働点数を一時的に他人から借りて買

い入れるなどしている。これが資本主義につながるかと批判され

た。

「走資派」はまさにそうした大衆の要求にこたえて経済建設を進めようとしたわけだ。文革派はこれに警告するだけでなく、深刻な路線闘争の末に打倒した。脱文革の願望を路線まで批判されかねない。

文革派は、鄧氏追放で勝利を手中にしたが、また多数を制したとはいえない。たしかに権力構造の中では、毛主席に近い

め毛思想の「解釈権」を持つていたのが強みだ。だがその拠点はマスメディアと大学を除くと、軍

関係は薄く、産業分野は大慶、大案などごく一部であり、党内でも大勢を制しているとはいえない

ではなから。敵対矛盾と断じ、反革命のレッテルをはった鄧氏の党

籍をはく奪できなかったことから

もそれほかかえる。

文革の対立再浮上

ポスト毛へ不安残す

り、この結果、文革で失脚した旧幹部が大膽に復活した。対外面では、革命外交から平和接近、日中正常化など国家外交に変わった。当時はこれを「潮流」と呼び、鄧小平復活はこの潮流に乗ったわけ

だ。

ところが三年夏の十全大会で「反潮流」が鼓吹された。いわば文革の対立が持ち越され、再び表面化したわけだ。この過程で、鄧小平復活というのが最終的には毛主席の承認を得たにせよ、やはり周首相の主導権も出て行

われたことが確認されたと思

かると、中国人はもともと政

争する。ポスト毛に大きな不安を残すことになるから。

――文革派と実務派に対して毛主席はどんな態度で臨んでいるのか。

中嶋氏 中国はこれまで穏歩と急進のサイクルを繰り返してきて

いるが、毛主席はある時には急激な変革が連続革命の思想につながるといい、他方では統一戦線の柔軟な思想をもっている。中国の政策自身もこの両義性を反映してき

た。毛沢東思想の解釈をめぐって路線闘争が起つたわけだ。毛主席自身は晩年になって急進的な

復活も闘争の一環

中嶋氏 今回の鄧小平氏失脚で懸念するのは、中国の路線闘争そのものが非常に深いところと、走資派が鄧個人にとどまらない深刻な背景があるというこ

文化大革命の時に鄧氏は批判さ

するのと同じ意味での政策論争

なのだが、これが常に権力闘争的色彩を帯びてくるのは、政策論争を政策論争として浄化する政治の仕組がないためだ。毛沢東が百

争争鳴運動（九五六年）を展開したときも運動に毛政治へ

の批判になると、力で押さえ

た。それ以来、毛沢東に対する反対意見が出てくると、力によってあるいは大衆運動によって打倒するといったパターンが定着してしまっている。

また、こんどの事件をみてわかるように、中国人はもともと政

争する。ポスト毛に大きな不安を残すことになるから。

――文革派と実務派に対して毛主席はどんな態度で臨んでいるのか。

中嶋氏 中国はこれまで穏歩と急進のサイクルを繰り返してきて

いるが、毛主席はある時には急激な変革が連続革命の思想につながるといい、他方では統一戦線の柔軟な思想をもっている。中国の政策自身もこの両義性を反映してき

た。毛沢東思想の解釈をめぐって路線闘争が起つたわけだ。毛主席自身は晩年になって急進的な

復活も闘争の一環

中嶋氏 今回の鄧小平氏失脚で懸念するのは、中国の路線闘争そのものが非常に深いところと、走資派が鄧個人にとどまらない深刻な背景があるというこ

文化大革命の時に鄧氏は批判さ

復活も闘争の一環

中嶋氏 今回の鄧小平氏失脚で懸念するのは、中国の路線闘争そのものが非常に深いところと、走資派が鄧個人にとどまらない深刻な背景があるというこ

文化大革命の時に鄧氏は批判さ

復活も闘争の一環

中嶋氏 今回の鄧小平氏失脚で懸念するのは、中国の路線闘争そのものが非常に深いところと、走資派が鄧個人にとどまらない深刻な背景があるというこ

文化大革命の時に鄧氏は批判さ

復活も闘争の一環

中嶋氏 今回の鄧小平氏失脚で懸念するのは、中国の路線闘争そのものが非常に深いところと、走資派が鄧個人にとどまらない深刻な背景があるというこ

文化大革命の時に鄧氏は批判さ

復活も闘争の一環

中嶋氏 今回の鄧小平氏失脚で懸念するのは、中国の路線闘争そのものが非常に深いところと、走資派が鄧個人にとどまらない深刻な背景があるというこ

文化大革命の時に鄧氏は批判さ

復活も闘争の一環

中嶋氏 今回の鄧小平氏失脚で懸念するのは、中国の路線闘争そのものが非常に深いところと、走資派が鄧個人にとどまらない深刻な背景があるというこ

文化大革命の時に鄧氏は批判さ

復活も闘争の一環

中嶋氏 今回の鄧小平氏失脚で懸念するのは、中国の路線闘争そのものが非常に深いところと、走資派が鄧個人にとどまらない深刻な背景があるというこ

文化大革命の時に鄧氏は批判さ

復活も闘争の一環

中嶋氏 今回の鄧小平氏失脚で懸念するのは、中国の路線闘争そのものが非常に深いところと、走資派が鄧個人にとどまらない深刻な背景があるというこ

文化大革命の時に鄧氏は批判さ

復活も闘争の一環

中嶋氏 今回の鄧小平氏失脚で懸念するのは、中国の路線闘争そのものが非常に深いところと、走資派が鄧個人にとどまらない深刻な背景があるというこ

文化大革命の時に鄧氏は批判さ

復活も闘争の一環

中嶋氏 今回の鄧小平氏失脚で懸念するのは、中国の路線闘争そのものが非常に深いところと、走資派が鄧個人にとどまらない深刻な背景があるというこ

文化大革命の時に鄧氏は批判さ

復活も闘争の一環

中嶋氏 今回の鄧小平氏失脚で懸念するのは、中国の路線闘争そのものが非常に深いところと、走資派が鄧個人にとどまらない深刻な背景があるというこ

文化大革命の時に鄧氏は批判さ

復活も闘争の一環